愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第39巻　第1号　19～30　1992

現代青年にみる人間関係に対する感情の構造

福　井　康　之
（教育心理学研究室）

（平成4年4月27日受理）

問　　題

若者たちがどのような考え方，感じ方をしているのかを理解することは，いつの時代でも，社会の構成員にとって必要なことである。共同社会の共存者である児童や青年たちを社会から疎外させてしまうか，未来を担う者として暖かく見守り，育てていけるかは，古い世代が若者たちを，どのように評価し，理解しているかということに，直接かかわることである。

現代のように，社会の変化が著しく，世代間の隔差が大きくなってしまっている時代には，なお一層，若者たちの実態を肯定的な姿勢で理解していく方向が強調されなくてはならない。また，若者たち自身が自分をどのように理解するかということは，彼等に接している周囲の大人たちの視点によって左右される。

かつて，Spranger, E.（1924）は，青年が他者から理解されたいと熱望するのは，自己理解することが困難なためだと指摘し，青年が自己を理解するために必要なのは，肯定的な自己理解を促進するための視点を大人が示すことだと言っている。

そのために必要なのは，共感的理解であるといい，また，青年期の研究の一つの方法として，了解的方法を提示している。それは，了解しようとする人の単なる経験や主観を越えた，より高次の歴史，社会，文化的視点からの超越的了解（Uberlgenes Verstenen）でなければならないといっている。

共感的理解や超越的了解といった視点の導入は，他者理解の方法として，多くの困難な問題を内包しつつも，人間関係の研究のための視点として，未だ課せられている問題でもある。

かねてから，対人関係における自他理解の方法を，感情の関係性から探ろうとしている福井康之（1990）にとっても，この他者への超越的了解への手掛りを求める資料の蓄積が必要でもある。本小論も，その一端である。

時代の要請によって本学部もカリキュラムの改革がなされ，それに伴って開講するようになった授業科目である「人間関係論」において，たまたま，福井の担当によって使用しているテキスト（福井，1990）中に，「感情の構造分析」の節がある。感情の研究の一つの方法として，従来の感情の研究のうち，多様な感情を基本感情の組み合せによって説明している感情論，特に，Plutchik, R.（1980）のモザイク説に疑問を提出して，感情語の因子分析によって，感情の構造を推定しようとしている増山英太郎（1986）の紹介がある。

この部分を説明するために，その論文に掲載されている増山・小俣の作成による32項目の感情語による日本舞踊の演目のイメージを評定させた用紙（附表1）があり，それをプリントし

て配布した。その折に，興味を持たすためと，授業への関心度や評価のフィードバックとして参考になるので，その用紙にこの授業のイメージを記名で評定させ，回収のうえ，情報科学コースの学生に手分けして次週までに，各項目毎の全員の平均値を計算して報告するよう依頼した。

次週の授業で，項目毎に板書させ，全員に平均値を知らせ，各自の評定用紙を返却して，自分の評定と平均値を比較させた。記名は返却のためのもので，各自の評定結果を個人的にチェックすることはしていない。

引き続いて，同じ形式の用紙を新たに配布して，演目に相当する評定対象を，今度は「人間関係」として，改めて評定させ，無記名で所属と性別を欄外に記入させたうえで，出席者全員回収した。

目　　的

授業中に実施した調査であり，被調査者にもサンプルとして偏りがあり，人数も少ないので，一般化することはできないが，現代の青年が「人間関係」についてどのような感情的な反応を示しているかを知る手掛りを得ることを目的として分析を試みた。

現代の青年像については，古い世代にとって理解を絶する不可解な存在であるといった若者の文化や風俗からの解釈（中野収，1985）などが一般化しており，福井康之・伊藤　徹（1988）において考察したように，人間関係に対して恐れといった否定的な反応態度や，対決を避け，怒りを示さず，逃避的であるといった視点が示されていた。

このような視点では，前述したように，青年期に対して肯定的な理解を示しているとはいえず，若者たちの感じ方について，もっと積極的で肯定的な側面を顕にする実証的なデータが必要と思える。

本報告では，学生の人間関係に対する感情語によるイメージ評定の結果の因子分析を通じて，現代青年の感情構造の積極的・肯定的な一面を明らかにすることを目的とする。

方　　法

調査対象：1991年度後期「人間関係論」受講学生，男子34名，女子52名，計86名（情報社会課程２回生　情報科学コース18名，国際文化コース18名，生活文化コース17名，小学校教員養成課程２回生　教育心理学専修生16名，その他17名）

調査日時：1992年１月20日(月)４時限（p.m 3:10～4:50）の講義の最初に前回実施した評定平均値を紹介した後，引き続いて実施した。約15分くらいの記入時間後，出席者全員の用紙を回収した。

調査用紙：増山英太郎（1986）の「イメージ調査表」をそのままプリントし，日本舞踊の演目の替りに「人間関係」を記入させ，32項目全てについて４段階の評定を求め，所属と性別のみを各自が記入のうえ，無記名で提出させた。

この用紙の32項目（感情語の名詞）を Plutchik の８つの基本感情の機能により分類したものが表１である。

手続き：記入の不完全な用紙を除き，男子34名，女子52名，計86名について，それぞれ項目毎に評定平均値と標準偏差値(n－1)を求めた。次いで，男，女，計それぞれの群別に32項目×32

表1　イメージ調査表の32項目をPlutchikの基本感情の機能により分類した一覧

破　壊	再生産	合　体（親和）	方向づけ	拒　否	保　護	再統合	探　索
1) 怒　り	7) 喜　び		13) 驚　き	16) 嫌　悪	18) 恐　れ	25) 悲しみ	31) 期　待
2) 当　惑	8) 快　さ	12) 容　認	14) 衝　動	17) 軽　蔑	19) 懸　念	26) 諦　念	32) 予　期
3) 嫉　妬	9) 感　謝		15) 驚　天		20) 罪悪感	27) 苦　悩	
4) 憎　悪	10) 誇　り				21) 不　安	28) 悲　嘆	
5) 媚　態	11) 目出たさ				22) 狼　狽	29) 落　胆	
6) 激　怒					23) 臆　病	30) 感　傷	
					24) 戦　慄		

増山英太郎（1986）の表1の語句を部分的に修正してある。

項目の相関行列を求め，因子分析を行った。主成分分析を行ない，固有値1.000以上の因子数を指定したバリマックス回転による各因子別の因子負荷行列を求め，その因子構造によって考察を行った。

結　　果

表2は項目毎の男子34名，女子52名，計86名の評定平均値と標準偏差値の一覧である。

表2　イメージ調査表の項目別評定平均値と標準偏差値（n－1）

項目名	男子（N＝34） 平均	標準偏差	女子（N＝52） 平均	標準偏差	計（N＝86） 平均	標準偏差
Q1（怒　り）	0.79	0.686	0.87	0.767	0.84	0.733
Q2（当　惑）	1.41	0.608	1.48	0.851	1.45	0.761
Q3（嫉　妬）	0.94	0.693	1.04	0.862	1.00	0.797
Q4（憎　悪）	0.59	0.556	0.69	0.875	0.65	0.763
Q5（媚　態）	0.82	0.757	0.54	0.670	0.65	0.715
Q6（激　怒）	0.59	0.701	0.58	0.667	0.58	0.676
Q7（喜　び）	1.59	0.925	1.94	0.751	1.80	0.837
Q8（快　さ）	1.44	0.927	1.81	0.864	1.66	0.902
Q9（感　謝）	1.68	0.767	2.00	0.816	1.87	0.808
Q10（誇　り）	1.35	0.812	1.50	0.918	1.44	0.875
Q11（目出たさ）	1.00	0.816	1.00	0.970	1.00	0.907
Q12（容　認）	1.35	0.848	1.67	0.809	1.55	0.835
Q13（驚　き）	0.88	0.807	1.31*	0.919	1.14	0.896
Q14（衝　動）	0.91	0.792	1.13	0.886	1.05	0.852
Q15（驚　天）	0.74	0.751	1.17*	0.879	1.00	0.854
Q16（嫌　悪）	0.82	0.672	0.94	0.725	0.90	0.703
Q17（軽　蔑）	0.74	0.665	0.62	0.631	0.66	0.643
Q18（恐　れ）	1.00	0.778	1.40*	0.955	1.24	0.906
Q19（懸　念）	0.97	0.797	1.17	0.943	1.09	0.889
Q20（罪悪感）	0.71	0.578	0.46	0.640	0.56	0.625
Q21（不　安）	1.47	0.825	1.62	0.952	1.56	0.902
Q22（狼　狽）	0.62	0.603	0.98*	0.959	0.84	0.852
Q23（臆　病）	1.09	0.830	1.27	0.992	1.20	0.930
Q24（戦　慄）	0.38	0.551	0.38	0.631	0.38	0.597
Q25（悲しみ）	0.94	0.776	1.08	0.709	1.02	0.735
Q26（諦　念）	0.62	0.739	0.81	0.841	0.73	0.803
Q27（苦　悩）	1.41	0.783	1.29	0.956	1.34	0.889
Q28（悲　嘆）	0.88	0.807	0.79	0.800	0.83	0.799
Q29（落　胆）	1.15	0.988	0.94	0.937	1.02	0.957
Q30（感　傷）	1.21	0.844	1.21	0.893	1.21	0.869
Q31（期　待）	1.68	0.944	1.77	0.854	1.73	0.886
Q32（予　期）	1.09	0.792	1.12	0.921	1.10	0.868

＊　t検定により男女の平均値間に危険率＜.05で差があるといえるもの

主成分分析の結果は男女を合計した群のものを表3に掲げておく。固有値 1.0以上のものは6因子あり，第1因子の寄与率は32.6%で，32項目の約⅓は第1因子で説明が可能であることを示している。第6因子で累積寄与率が63.9%あり，約⅔がこの6個の因子で解釈できることを示している。

そこで，男子，女子およびその合計の群について主成分分析の結果に基づき，男子は6因子，女子は5因子，計の群は6因子でバリマックス回転による因子分析を行ない，それぞれの結果を表4，表5，表6に示した。

表3 主成分分析による因子別因子負荷行列

計 n＝86

	1因子	2因子	3因子	4因子	5因子	6因子	共通性の推定
Q1（怒り）	0.519	0.189	0.429	−0.242	−0.154	0.235	0.666
Q2（当惑）	0.489	0.170	0.150	0.365	−0.272	0.070	0.534
Q3（嫉妬）	0.660	0.125	−0.198	−0.111	−0.202	−0.136	0.577
Q4（憎悪）	0.510	0.167	0.248	−0.141	−0.350	0.311	0.533
Q5（媚態）	0.513	0.211	0.009	−0.264	−0.301	−0.073	0.519
Q6（激怒）	0.561	0.282	0.414	−0.198	−0.162	0.222	0.666
Q7（喜び）	0.475	−0.629	−0.253	−0.003	−0.330	0.166	0.844
Q8（快さ）	0.447	−0.738	−0.249	−0.088	−0.155	0.135	0.844
Q9（感謝）	0.505	−0.500	−0.100	−0.171	0.085	0.015	0.601
Q10（誇り）	0.482	−0.594	−0.049	−0.143	0.211	0.104	0.653
Q11（目出たさ）	0.464	−0.373	0.393	−0.162	0.164	−0.021	0.532
Q12（容認）	0.318	−0.612	−0.077	0.064	−0.156	−0.102	0.559
Q13（驚き）	0.284	−0.511	0.568	0.227	0.156	−0.005	0.706
Q14（衝動）	0.519	−0.324	0.513	0.075	−0.077	−0.264	0.613
Q15（驚天）	0.461	−0.335	0.540	0.272	0.219	−0.137	0.706
Q16（嫌悪）	0.618	0.232	0.127	−0.023	−0.001	0.065	0.535
Q17（軽蔑）	0.587	0.229	0.095	−0.348	0.052	0.019	0.547
Q18（恐れ）	0.623	0.164	0.072	0.393	−0.207	0.095	0.611
Q19（懸念）	0.662	0.252	−0.153	0.036	−0.100	−0.454	0.627
Q20（罪悪感）	0.574	0.230	0.016	−0.370	−0.033	0.065	0.587
Q21（不安）	0.611	0.251	−0.183	0.449	−0.140	−0.031	0.657
Q22（狼狽）	0.629	0.119	0.020	0.428	0.127	0.035	0.578
Q23（臆病）	0.669	0.173	−0.258	0.275	−0.120	−0.012	0.611
Q24（戦慄）	0.507	0.270	0.138	−0.098	0.096	−0.373	0.507
Q25（悲しみ）	0.746	0.049	−0.103	0.033	0.272	0.166	0.654
Q26（諦念）	0.592	0.124	−0.009	−0.149	−0.027	−0.465	0.627
Q27（苦悩）	0.724	0.184	−0.249	0.232	0.090	0.217	0.695
Q28（悲嘆）	0.691	0.284	−0.108	−0.045	0.452	0.118	0.757
Q29（落胆）	0.774	0.226	−0.235	−0.187	0.331	0.043	0.757
Q30（感傷）	0.759	0.010	−0.251	−0.077	0.172	0.004	0.700
Q31（期待）	0.563	−0.485	−0.297	0.068	0.122	0.033	0.653
Q32（予期）	0.305	−0.410	−0.215	−0.197	−0.259	−0.205	0.479
固有値	10.439	3.792	2.173	1.604	1.321	1.105	
寄与率(%)	32.6	11.9	6.8	5.0	4.1	3.5	
累積(%)	32.6	44.5	51.3	56.3	60.4	63.9	

表4　バリマックス回転後の因子負荷行列

男子　n＝34

	1因子	2因子	3因子	4因子	5因子	6因子
Q 1（怒　り）	0.171	−0.002	0.136	0.845	0.191	−0.068
Q 2（当　惑）	0.026	−0.370	−0.173	0.392	0.002	0.293
Q 3（嫉　妬）	0.318	−0.388	−0.088	0.340	0.485	0.139
Q 4（憎　悪）	0.460	−0.251	0.307	0.110	0.216	−0.100
Q 5（媚　態）	0.406	−0.423	0.058	0.275	0.190	0.062
Q 6（激　怒）	0.329	0.030	0.056	0.756	0.295	−0.142
Q 7（喜　び）	0.105	−0.858	−0.034	0.084	0.113	−0.224
Q 8（快　さ）	−0.098	−0.842	−0.151	−0.015	0.100	−0.324
Q 9（感　謝）	−0.123	−0.394	−0.014	0.067	0.460	−0.510
Q10（誇　り）	0.275	−0.213	−0.084	0.032	0.373	−0.676
Q11（目出たさ）	0.053	−0.389	−0.488	0.078	0.475	−0.154
Q12（容　認）	0.274	−0.323	−0.496	−0.001	−0.054	−0.483
Q13（驚　き）	0.111	0.010	−0.774	−0.169	0.172	−0.200
Q14（衝　動）	0.312	−0.177	−0.568	0.345	−0.045	−0.314
Q15（驚　天）	−0.047	−0.091	−0.677	0.074	0.492	−0.025
Q16（嫌　悪）	0.574	0.109	−0.001	0.386	0.501	−0.060
Q17（軽　蔑）	0.317	0.113	−0.221	0.471	0.272	−0.107
Q18（恐　れ）	0.669	0.037	−0.041	0.098	0.208	−0.152
Q19（懸　念）	−0.051	−0.229	−0.311	0.643	0.033	−0.018
Q20（罪悪感）	0.316	0.000	−0.275	0.525	0.445	0.032
Q21（不　安）	0.101	−0.109	−0.096	0.659	0.010	0.019
Q22（狼　狽）	0.565	0.057	−0.216	0.425	0.070	0.040
Q23（臆　病）	0.771	−0.088	−0.185	0.184	0.199	−0.170
Q24（戦　慄）	0.210	−0.133	−0.337	0.365	0.557	0.163
Q25（悲しみ）	0.434	−0.151	−0.112	0.176	0.560	−0.465
Q26（諦　念）	0.037	−0.219	−0.522	0.365	−0.008	0.049
Q27（苦　悩）	0.064	−0.159	−0.065	0.574	0.547	−0.229
Q28（悲　嘆）	0.248	0.016	−0.154	0.142	0.821	−0.116
Q29（落　胆）	0.045	−0.237	−0.060	0.572	0.601	−0.197
Q30（感　傷）	0.278	−0.395	0.006	0.234	0.567	−0.118
Q31（期　待）	0.105	−0.283	−0.138	0.241	0.151	−0.748
Q32（予　期）	−0.018	−0.406	−0.181	−0.031	−0.183	−0.529

表5　バリマックス回転後の因子負荷行列

女子　n＝52

	1因子	2因子	3因子	4因子	5因子
Q 1（怒　り）	0.229	0.087	0.528	−0.380	0.073
Q 2（当　惑）	0.181	0.027	0.293	−0.164	0.660
Q 3（嫉　妬）	0.415	−0.280	−0.130	−0.452	0.317
Q 4（憎　悪）	0.187	0.039	0.342	−0.544	0.311
Q 5（媚　態）	0.245	−0.053	0.082	−0.686	0.212
Q 6（激　怒）	0.171	0.188	0.466	−0.488	0.208
Q 7（喜　び）	−0.011	−0.849	0.061	−0.111	0.205
Q 8（快　さ）	0.102	−0.874	0.159	−0.029	0.032
Q 9（感　謝）	0.233	−0.621	0.228	−0.201	−0.070
Q10（誇　り）	0.230	−0.683	0.331	0.059	−0.149
Q11（目出たさ）	0.094	−0.263	0.681	−0.112	−0.057
Q12（容　認）	−0.094	−0.684	0.061	0.056	0.086
Q13（驚　き）	−0.086	−0.280	0.729	0.053	0.000
Q14（衝　動）	0.049	−0.202	0.755	−0.202	0.105
Q15（驚　天）	0.086	−0.169	0.767	0.045	0.184
Q16（嫌　悪）	0.325	−0.048	0.171	−0.403	0.302
Q17（軽　蔑）	0.497	−0.074	0.130	−0.510	0.052
Q18（恐　れ）	0.266	−0.040	0.228	−0.251	0.724
Q19（懸　念）	0.685	−0.045	−0.071	−0.309	0.335
Q20（罪悪感）	0.371	−0.164	0.019	−0.552	0.069
Q21（不　安）	0.430	−0.111	−0.032	−0.085	0.732
Q22（狼　狽）	0.553	−0.104	0.271	0.114	0.495
Q23（臆　病）	0.502	−0.191	−0.180	−0.188	0.580
Q24（戦　慄）	0.419	0.154	0.120	−0.279	0.107
Q25（悲しみ）	0.713	−0.081	0.151	−0.132	0.238
Q26（諦　念）	0.660	−0.091	0.045	−0.427	0.052
Q27（苦　悩）	0.513	−0.192	0.016	−0.018	0.651
Q28（悲　嘆）	0.803	0.032	0.061	−0.067	0.303
Q29（落　胆）	0.888	−0.104	0.051	−0.127	0.197
Q30（感　傷）	0.735	−0.330	0.117	−0.152	0.175
Q31（期　待）	0.363	−0.691	0.101	0.162	0.179
Q32（予　期）	0.073	−0.491	−0.025	−0.289	0.031

表6　バリマックス回転後の因子負荷行列

計　n＝86

	1因子	2因子	3因子	4因子	5因子	6因子
Q 1（怒　り）	0.093	0.007	0.232	−0.718	0.211	−0.070
Q 2（当　惑）	0.615	−0.020	0.180	−0.284	0.050	−0.095
Q 3（嫉　妬）	0.307	−0.269	−0.081	−0.277	0.322	−0.455
Q 4（憎　悪）	0.261	−0.120	0.056	−0.700	0.110	−0.032
Q 5（媚　態）	0.157	−0.126	−0.082	−0.480	0.170	−0.409
Q 6（激　怒）	0.172	0.065	0.208	−0.729	0.246	−0.104
Q 7（喜　び）	0.202	−0.875	0.060	−0.115	0.002	−0.009
Q 8（快　さ）	0.034	−0.911	0.135	−0.023	0.088	0.011
Q 9（感　謝）	−0.058	−0.622	0.241	−0.055	0.296	−0.108
Q10（誇　り）	−0.111	−0.644	0.338	−0.011	0.346	0.031
Q11（目出たさ）	−0.135	−0.298	0.584	−0.243	0.219	−0.086
Q12（容　認）	0.084	−0.647	0.265	0.080	−0.071	−0.117
Q13（驚　き）	0.038	−0.225	0.819	−0.051	−0.031	0.122
Q14（衝　動）	0.127	−0.233	0.707	−0.233	−0.018	−0.306
Q15（驚　天）	0.163	−0.122	0.833	−0.049	0.132	−0.059
Q16（嫌　悪）	0.292	−0.012	0.153	−0.390	0.397	−0.194
Q17（軽　蔑）	0.006	−0.040	0.060	−0.467	0.470	−0.294
Q18（恐　れ）	0.683	−0.087	0.184	−0.266	0.192	−0.105
Q19（懸　念）	0.385	−0.062	0.035	−0.087	0.329	−0.688
Q20（罪 悪 感）	0.027	−0.096	−0.042	−0.494	0.435	−0.281
Q21（不　安）	0.745	−0.065	0.013	−0.060	0.287	−0.216
Q22（狼　狽）	0.591	−0.043	0.285	−0.040	0.414	−0.072
Q23（臆　病）	0.619	−0.198	−0.040	−0.104	0.368	−0.252
Q24（戦　慄）	0.120	0.137	0.211	−0.173	0.339	−0.533
Q25（悲 し み）	0.295	−0.223	0.166	−0.176	0.687	−0.064
Q26（諦　念）	0.132	−0.090	0.149	−0.139	0.301	−0.669
Q27（苦　悩）	0.562	−0.188	−0.015	−0.151	0.595	−0.039
Q28（悲　嘆）	0.205	0.022	0.095	−0.150	0.839	−0.107
Q29（落　胆）	0.166	−0.141	−0.012	−0.196	0.835	−0.263
Q30（感　傷）	0.243	−0.332	0.046	−0.132	0.645	−0.262
Q31（期　待）	0.174	−0.664	0.174	0.125	0.374	−0.062
Q32（予　期）	−0.031	−0.583	−0.003	−0.029	−0.042	−0.335

太線で示したものは他の因子に負荷が少なく，単独にその欄に示す因子に大きく負荷していることを示し，細線でアンダーラインを引いてあるものは複数の因子に同程度負荷していることを示している。

考　　察

図1は表2の項目別の平均値を図示したものである。

喜び，快さ，感謝，誇りといった項目群の得点が他の項目に比して高得点を占めている。これらの項目は positive な感情であり，人間関係に対して積極的・肯定的な感情を抱いていることを示している。同様に positive な感情である容認や期待の評定値も高い。

その他で，比較的評定平均値の高いもので，当感，恐れ，不安，苦悩といった negative な感情を示すものも，人間関係に対するイメージとして抱いていることを示している。しかし，憎悪，激怒，軽蔑，罪悪感，戦慄，諦念といった激しい，あるいは強い negative な感情を抱いてはいないことも明らかである。

特に， positive な感情については男子より女子の方が評定値が高い傾向を示し，恐れや狼狽といった negative な感情も女子の平均は男子より高い。また，驚き，驚天といった positive な感情は全体的に評定値は高くなくても，女子の方が男子より反応が大きい。positive であれ negative であれ，感情的な反応は一般に，男子より女子の方が顕著であるということが，ここでも示されているといえよう。

しかしながら，男子と女子の間には，これら32種類の感情についての評定に，反相する反応

や著しい差は認められないといってよい。

評定値からだけの「人間関係」に対するイメージは，不安や恐れ，当惑，苦悩といった人間関係に対する逃避的な傾向は認められるが，それ以上に，喜びや，快さ，感謝，容認といった積極的・肯定的な感情的イメージを持っており，人間関係に対する期待も大きいということを示している。

感謝に対する評定値が他に比して高いというのは，意外でもあるが，おそらく，発達途上で経験してきた人間関係に対して，あまり否定的な体験を多く持っておらず，受容され，本人にとって有効な経験を与えられてきたというふうに意識していることを暗に示している。

次に，因子分析による感情構造について考察を進める。

図1　項目別評定平均値

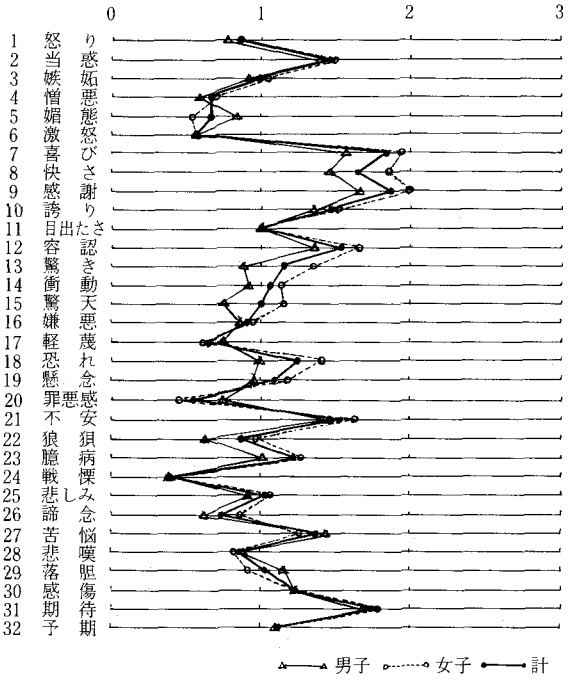

表3から，この調査表に基づく全体の構造は，第1因子に項目13《驚き》を除いて.300以上の負荷を持って，ほとんどの項目が，主たる1つの因子で解釈可能なことを示している。しかも，驚き，衝動，驚天という項目が第3因子にまとまって負荷しているところから，第1因子が通常の喜怒哀楽を示す感情群と命名すれば，感情の種類のなかで，驚きの感情は別の次元，あるいは感情とは別の意識であるといわれている事情と符合している。

第2因子は8項目めの喜び以下12項目めの容認と31，32項目の期待，予期という positive な感情群が他の感情とは別のものとして分類できることを示唆している。

第4因子は，恐れ，罪悪感，不安，狼狽など negative な感情群であり，第5因子は，悲しみ，悲嘆，落胆などの悲しみ感情群で，喜びがマイナスで負荷していることから，喜びが悲しみの対極を示す感情だと理解されている事情が察せられる。第6因子は懸念，憎悪という，人間関係に対する《絶望感》とでも名付けられる感情群の因子である。

固有値1,000以上の因子は，男子は6因子，女子は5因子，男女合計したものは6因子であり，それぞれバリマックス回転した表4，表5，表6から，それぞれの因子に32項目の感情名を適切に分類できたものとして，各因子毎に負荷している感情名を列挙してみたのが，表7，表8，表9である。

表9の全体の感情構造を見ると，第1因子は《恐れの因子》，第2因子は《喜びの因子》，第3因子は《驚きの因子》，第4因子は《怒りの因子》，第5因子は《悲しみの因子》，第6因子は，懸念，戦慄，諦念といった混合感情として人間関係に対する《無力感の因子》とでもいえるのである。

表7，8，9中に（　）で示されている感情名は，表4，5，6で細線のアンダーラインが

表7　各因子に負荷する項目（感情）名の分類　　男（n＝34）

第1因子（恐れ）	第2因子（喜び）	第3因子（驚き）	第4因子（怒り）	第5因子（悲しみ）	第6因子（期待）
恐れ	喜び	驚き	怒り	戦慄	誇り
臆病	快さ	衝動	激怒	悲嘆	期待
(嫉妬)	(当惑)	驚天	軽蔑	感傷	予期
(憎悪)	(嫉妬)	諦念	懸念	(嫉妬)	(感謝)
(媚態)	(媚態)	(憎悪)	不安	(感謝)	(容認)
(狼狽)	(感謝)	(目出たさ)	(当惑)	(目出たさ)	(悲しみ)
(悲しみ)	(目出たさ)	(容認)	(嫉妬)	(嫌悪)	
			(嫌悪)	(罪悪感)	
			(罪悪感)	(苦悩)	
			(狼狽)	(落胆)	
			(苦悩)		
			(落胆)		
保護	再生産	方向づけ	破壊 拒否 保護	保護 再統合	再生産 探索

表8　各因子に負荷する項目（感情）名の分類　　女（n＝52）

第1因子（悲しみ）	第2因子（喜び）	第3因子（怒り）	第4因子（憎悪）	第5因子（恐れ）
懸念	喜び	怒り	憎悪	当惑
戦慄	快さ	目出たさ	媚態	恐れ
悲しみ	感謝	驚き	罪悪感	不安
諦念	誇り	衝動	(嫉妬)	(嫌悪)
悲嘆	容認	驚天	(激怒)	(狼狽)
落胆	期待	(激怒)	(嫌悪)	(臆病)
感傷	予期		(軽蔑)	(苦悩)
(嫉妬)				
(軽蔑)				
(狼狽)				
(臆病)				
(苦悩)				
保護 再統合	再生産 合体 探索	破壊 方向づけ	破壊 保護	破壊 保護

表9　各因子に負荷する項目（感情）名の分類　　計（n＝86）

第1因子（恐れ）	第2因子（喜び）	第3因子（驚き）	第4因子（怒り）	第5因子（悲しみ）	第6因子（無力感）
当惑	喜び	目出たさ	怒り	悲しみ	懸念
恐れ	快さ	驚き	憎悪	悲嘆	戦慄
不安	感謝	衝動	激怒	落胆	諦念
狼狽	誇り	仰天	罪悪感	感傷	(嫉妬)
臆病	容認		(媚態)	(嫉妬)	(媚態)
(嫉妬)	期待		(嫌悪)	(嫌悪)	
(苦悩)	予期		(軽蔑)	(軽蔑)	
				(苦悩)	
保護	再生産 合体 探索	方向づけ	破壊	再統合	保護 再統合

してある複数の因子に負荷している項目を記入したものであるが，表9では喜びと驚きの2つの positive な感情の因子には含まれず，この2つの因子は他のものとは明瞭に異った独立した感情群であるといえる。恐れ，怒り，悲しみ，無力感という negative な感情群には，嫌悪，軽蔑，苦悩といった感情が部分的に共有されていることを示している。

福井（1990）には，現代青年の感情面の特徴の一つとして，嫉妬の感情が希薄化していることを指摘していたが，この結果からも，嫉妬は恐れと悲しみ，無力感という3つの感情群に分散して負荷しており，独自の感情として分離されていないので，錯綜した混合感情であることが推定され，把握されにくい感情なのであろう。そのうえ，図1でも明瞭なように，人間関係の中で，そんなに激しい感情として意識されていないことが示唆されている。

これらの6つの因子が示す感情を，表1に示したように， Plutchik の8つの基本感情が有機体の合目的的な行動に対して果す機能によって，それぞれの感情の持つ意味を示したものに対応づけてみた。表7，8，9の下段に示したものがそれである。

表9では，恐れの因子は保護という機能に対応している。それぞれの因子に負荷の大きい感情群が，その項目の評定の平均値の大きさがどの程度であったかということを対応させて考察してみると，当惑，恐れ，不安といった感情が人間関係への評定値として高かったということは，評定をした若者たちが，人間関係の中で，保護という機能を求めていることを示している。

ところが，第2因子（喜び）に負荷している感情群の評定平均値は，予期の感情が少し低めだが，他は全て高い評定値を示している。これらの感情は，再生産・合体・探索という有機体の行動を求める機能である。即ち，若者たちは人間関係の中に，新たにものを創造するための一体化した共同関係を積極的に探し求めるものとして意味を持つ感情を抱いているということなのである。

具体的にいえば，彼等にとって人間関係とは，積極的に異性を求め，合体し，生殖を期待する相手を探し求めるものとしての感情的な高まりを背景に秘めたものとしてイメージされているというわけなのである。しかしながら，それが具体的な姿として結実してイメージされているかは不明であり，無意識的なレベルでの感情による象徴的なイメージとして考えるべきなのかは，それをチェックできる他の調査と同時施行しなければ判明しない。おそらく，当の若者自身も，人間関係についての感情的なイメージが，合体と再生産を探索するものとしての意味づけがされるものだとは気付いていないのではなかろうか。

同様に，表7からの男子の人間関係に対する感情のあり方と，表8からの女子の人間関係に対する感情構造とを比較してみると，少し違いがみられる。

男子の場合は，第1因子から第5因子までの因子の命名は，全体の感情構造と同じであるが，第6因子は期待といった感情群の因子である。ところが女子の場合，人間関係に対する感情の構造は，5つの因子で説明ができ，より単純である。それは，驚きという感情群と，怒りという感情群が一体化しているという特徴を示している。また，男女ともに，悲しみの因子は，単に援助を求め，新たな人間関係を作り直すという再統合の機能だけでなく，それらの感情と共に恐れといった保護を求める行動を始発させる感情を共存させているということが推定される。

特に，女子の場合，人間関係への保護や方向づけに，怒りに代表される破壊の機能を持つ感情が共存しており，男子には，その傾向がみられない。男子に比して，女子は人間関係に対して破壊的な感情を他の感情と共存させていることが察せられ，人間関係に保護的な機能を持たせながら，攻撃的な様相に容易に転化するといった混とんとした感情状態を保持していると思

える。

しかしながら，人間関係を新しいものの創造として意味づける再生産の機能を持つ感情群の評価が高いということは，男女共に共通して，男女を合計した群でのイメージの全体構造からいえることと同様のことが指摘できる。

以上のとおりの概観から，とりあえず結論づけられることは，この調査のサンプルからは一般化することは困難であるが，少くとも「人間関係論」を受講していた学生は，人間関係に，喜び，快さ，感謝，誇り，容認，期待，予期といった positive な感情を抱いており，従来から指摘されていた若者に対する評価として，恐怖，不安，当惑といった人間関係に対する negative な感情をも併せ持っているが，それ以上に positive な感情が強いのだということ，特に，女子にそれが顕著にみられ，同時に怒りといった破壊的な感情も潜在化して抱いているということが示唆された。

なお，今回の報告は，人間関係のイメージ調査に応わしい感情項目を必ずしも具備しているとはいえない調査用紙を流用したものであり，その考察にも限界がある。適切な調査対象と人数が保障された調査の機会が得られることを後日に期待して，この報告は予備的なものに過ぎないことを付記しておく。

文　　献

福井康之・伊藤徹（1988）感情の構造論からみた現代青年の特徴　愛媛大学教育学部紀要　第Ⅰ部　教育科学　第34巻　13－25.

福井康之（1990）感情の心理学―自分とひととの関係性を知る手がかり　川島書店

増山英太郎（1986）基本感情はいくつあるか―日本舞踊のイメージ調査を通じて　人文学報（東京都立大学人文学部）第183号　17－42.

中野収（1985）まるで異星人（エイリアン）有斐閣

Plutchik, R. (1980) *Emotion — a psychoevolutionary synthesis*. Harper & Row.

Spranger, E. (1924) *Psychlogie des Jugendalters*. Quelle & Meyer Verlag（原田茂訳「青年の心理」協同出版 1973）

（評定用紙の集計及び電算機による計算は，渡辺弘純教授担当の「教育心理学研究法Ⅱ〈観察・調査〉」の受講学生である教育心理学専修２回生14名の練習問題の一つとして課されたが，主として，武智久充子と武智直子が分担した。使用した統計用ソフトは市販の「社会情報サービス・統計解析シリーズ12. マルチ統計」の因子分析プログラムによる。）

附表1

イメージ調査表

以下の2枚に示されている32の名詞は，いずれもイメージ（雰囲気，情緒，情動）を表わすものですが，≪人間関係≫が，各名詞で表わされるイメージをどの程度含むかを，数字に一つずつ丸印をつけて評定して下さい。

1）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　怒り　□

2）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　当惑　□

3）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　嫉妬　□

4）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　憎悪　□

5）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　媚態　□

6）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　激怒　□

7）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　喜び　□

8）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　快さ　□

9）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　感謝　□

10）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　誇り　□

11）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　目出たさ　□

12）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　容認　□

13）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　驚き　□

14）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　衝動　□

15）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　驚天　□

16）　0 ―― 1 ―― 2 ―― 3　嫌悪　□

17) 軽蔑 □
18) 恐れ □
19) 懸念 □
20) 罪悪感 □
21) 不安 □
22) 狼狽 □
23) 臆病 □
24) 戦慄 □
25) 悲しみ □
26) 諦念 □
27) 苦悩 □
28) 悲嘆 □
29) 落胆 □
30) 感傷 □
31) 期待 □
32) 予期 □

0	1	2	3
ない	ややある	かなりある	非常にある